



入っていました、ところが制作のため東京へ出発する前日近所で偶然良い井戸を発見してそれから思ひついて水を汲んでいる女を描いてみました、四週間位で完成する予定が七週間になり随分苦心しましたが年来の望が達せられたので骨折り甲斐があつたと喜んでる次第です」(「井戸で水汲む女を／七週間で描く／新特選の鬼頭氏語る」新愛知 昭和9年10月16日 \*文中／は改行を表す。)

これは特選を報じる新聞記事の一節ですが、私が知る限り作家がこの作品についてふれた唯一のもので。田近のものも私が知る限り《手をかざす女》について詳しく述べた唯一のもので。田近は、文をまとめるにあたり、作家から事前に話を聞か、掲出前の確認と承諾を得ていたでしょう。今この作品を無心に見るとき、女性の背後にあるものを農地や井戸だとすぐに判断できる人はどれほどあるでしょう。バケツに水は本当に汲まれているのか。丁寧に見れば、判断は付きかね、田近が書くようには必ずしも受け止めることができないのではないのでしょうか。

田近の文に見るべきところは、「神聖なほどにも深い」「労務」を「祈り」「祝福」するものだという指摘です。「労務」(=労働のつとめ)であって「労働」ではないことに注意してください。みずからに課せられた「労務」を見事にこなすことが祈られ、成し遂げることによって祝福される女性が描かれているというのです。ここに描かれているのは、理想化されたひとつの良妻賢母像だといえるでしょう。母子像や家事をする女性は、西洋の文化の文脈から切り離され、当時の日本の文化や価値観を表すものとなっています。

黒田らの作品を少し見てみましょう。《白き着物を着せる西洋婦人》は、黒田のフランス留学時代の作品です。右手を額にかざす姿勢は、黒田の代表作のひとつ《智・感・情》

の「智」を表す女性の姿にも引き継がれています。手をかざす女性の姿は、黒田がパリで師事したラファエル・コラン (1850-1916) にも作例を見ることができます。

《墓参》は鬼頭の師である岡田の作品です。老齡の和装の女性が描かれていますが、《手をかざす女》と同じ構図をしています。富国強兵政策を推し進める明治政府のもと、男性は良き働き手であり、兵士であることが、女性にはそのような男性を支えるものとして良き妻、賢き母であることが求められました。軍国主義の強まりとともにこのような考えはより広く受け入れられて行きます。《墓参》もまた《手をかざす女》と同様に今の私たちには、それが意味するものをすぐには理解することが難しい作品です。明治以前からの「三従 (=幼いときは父兄に、嫁いでは夫に、夫亡きあとは子に従うこと)」を具現する女性像として見るならば、この作品もまたひとつの良妻賢母像を示すものといえるでしょう。

鬼頭は、《手をかざす女》を帝展に出品した3年後の昭和12 (1937) 年に帝展を組織変更してはじまった第1回文部省美術展覧会 (略称：新文展) に《海辺》を出品しています。描かれた三人の人物のうち、向かって右に立つ女性は、背向きながらも《手をかざす女》に描かれた女性と同じ服装をしていることが分かります。《海辺》もまた何を表現しているのか分りかねる作品ですが、男性一人を挟んで、二人の女性を対比させたものと見ることができるかもしれません。右の女性が前掛けにつっかけの生活感のある姿なのに対して、左の女性はかかとのある靴を履き、外出の装いをしているように見受けられます。戦時状況を描く一方で、美しく装った女性の姿を日米開戦の後にも描いていた作家にとって、家事を担う女性と存在として美しくある女性はいずれも捨てがたいものであった

のかもかもしれません。

「海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がある。そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある。」と三好達治 (1900-1964) が「郷愁」に記した詩集『測量船』の発行が昭和5 (1930) 年。これを鬼頭が知っていたとすれば、海は、いずれにしても女性を背負うものだということを表すために描かれているようにも思えてきます。

第1回新文展のあった昭和12 (1937) 年には中国との紛争が日中戦争へと拡大し、国家統制が強められて行くこととなります。満州国が建国された昭和7 (1932) 年に発足した国防婦人会は白の割烹着とたすきを会服としていました。鬼頭の作品に描かれた前掛けもまた世相を反映した同様の意味合いを持つものとして捉えることができるでしょう。

官展は多くの入場者を集めました、人々はその場から様々なことがらを感じ取っていたことでしょう。官展についての情報は、新聞や雑誌などのメディアにも取り上げられ、それらもまた人々のものの見方や考えに影響を及ぼしました。入選や特選といった選別を通して、技量のみならず表現内容もが問われることによって、作家もまた時代が求めるものの見方や考えに染まって行くことがあったでしょう。

《手をかざす女》もまた時代によって生み出された作品のひとつといえるでしょう。(み。)

(注記) 本稿に引用したものの他に主に下記の文献類を参照しました。中村義一「日本近代美術論争史」、求龍堂、昭和56年



図2 黒田清輝《白き着物を着せる西洋婦人》1892年 ひろしま美術館蔵



図3 黒田清輝《智・感・情》1897-99年 東京文化財研究所蔵のうち「智」



図4 岡田三郎助《墓参》1915年 福岡市美術館蔵



図5 鬼頭鍋三郎《海辺》1937年 個人蔵

中村義一「続日本近代美術論争史」、求龍堂、昭和57年  
若桑みどり「戦争がつくる女性像 第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ」、筑摩書房、1995年  
若桑みどり「隠された視線 浮世絵・洋画の女性裸体像」(岩波 近代日本の美術2)、岩波書店、1997年  
宮下規久朗、「刺青とヌードの美術史 江戸から近代へ」、2008年、日本放送出版協会  
清永孝「裁かれる大正の女たちー〈風俗清乱〉という名の弾圧」(中公新書1183)、中央公論社、1994年  
清永孝「良妻賢母の誕生」(ちくま新書039)、筑摩書房、1995年  
仙波千枝「良妻賢母の世界ー近代日本女性史」、慶友社、2008年  
展覧会カタログ「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展」、東京国立文化財研究所・大分市美術館、1999年 (2・3)  
展覧会カタログ「日本近代洋画の栄華 岡田三郎助」、佐賀県立美術館、1993年 (4)  
展覧会カタログ「鬼頭鍋三郎展」、朝日新聞社、1991年 (5)  
図版は、1を除いて上記展覧会カタログから再録しており、末尾に図版番号を( )付で記しています。

## 展覧会の舞台裏 広報⑥

この欄をずっとお読みいただいている方なら、多分疑問に思われることがあると思います。広報というなら、情報を発信したいのなら、なぜSNS (ソーシャル・ネットワーク・サービス) の話が出てこないのだと。コンピュータやスマホが全盛のこのご時世に、効果的な広報をしたいのならFacebookやLINE、Twitterといったツールを利用しない手はないだろう、と思われるに違いありません。ひょっとしてこの欄の書き手は、その手の最新技術に疎いアナログ人間なのだろうかとお考えのあなた、その通りです。筆者は、上記三つのツールについて、言葉としては知っていますが、利用したことは全くなく、どのような仕組みで何が可能なのかも知りません。もちろんコンピュータは日々利用していますし、文書の作成やデータ処理、画像の授受、ネットによる情報検索、メール通信など、公私両面にわたってコンピュータの無い生活は考えられないほどお世話になっています。しかし、どうしてもSNSには触手が伸びないのです。そもそも、それで何ができるのかという基本的な知識が欠けているために興味が湧いてこないという側面もありますが、これらのSNSに付きまとう個人情報のやり取りに対して、どうしても積極的になれず、何がしかの危うさを感じてしまうのです。最近大きな話題になった芸能人の不倫話のような

ことを心配しているわけではないのですが、どうして見知らぬ他人に自分の個人情報さらけ出さねばならぬのだ、と腰が引けてしまうのです。

すいません。何せよく知らないことについて語っているの、とんでもない勘違いをしているのかも知れません。現に世界で何十億という人々が、これらのSNSを日々活用しているようですし、電車の中でスマホを利用している圧倒的多数の乗客を目撃すると、取り残された感がなくもないのですが、それでもなお二の足を踏んでしまいます。時折受信メールの中に、「○○さんからつながりリクエストが届いています」というメッセージを発見するのですが、「言いたいことがあるなら、直接言ってこい!」と、多分に理不尽な感想を抱いて、即座に削除してしまいます。そのような保守的な姿勢では、時代に即応した効果的な広報など所詮無理、というお叱りの言葉がすぐにも飛んできそうです。恐らくその通りなのでしょう。ポスターやチラシなど、従来のアナログ型のメディアが効力を失ったわけではありませんが、そのメディアに強く反応するのは、社会の中でも限られた層になっているに違いありません。メディアが多様化するということは、単にツールが増えるだけでなく、受信する側も細分化されるということで、それぞれに応じたきめ細かな対応が発信側には求められます。そしてメディアが異なれば、そこに載せる内容 (展覧会) の受け止められ方が変わってくる可能性があります。新たなメディアの登場は、新たな展覧会の受容や価値観を生み出す可能性を秘めています。(F)

## 感想ノートから

今回は、2016年1月5日から2月21日まで開催された「ポジション2016 アートとクラフトの蜜月」展への感想をご紹介します。アートとクラフトの狭間にあるような作品を展示したこの展覧会には、概ね好意的な感想が寄せられましたが、企画についてのご批判もありました。ここでは、肯定的な感想と否定的な感想をひとつずつご紹介したいと思います。「時間がだいぶ余ったので立ち寄ってみました・・・良かった!どれも素晴らしい作品でした。エネルギーを頂いた気がします!!・・・(中略)・・・特に芸術に詳しいわけでもない私ですが、・・・“芸術に触れる”とはこういう事なんだ、と改めて感じさせて頂きました。これからも、いろんな美術館めぐり、感性を豊かにしていきたいと思えました。素敵な時間をありがとうございました。感謝。」

時間の空いた時にふらりと美術館を訪れていただくのは大変嬉しいですし、また、芸術に「触れる」ぐらいの気軽な気持ちで美術館を見ていただくということもとても良いことと思えました。この展覧会の意図として、皆さんに美術を気軽に味わっていただきたいと

いうことがありましたので、こういった感想をいただくと、「よかった」と感じます。一方で、次のようなご意見もありました。

「個々の作品は良いのですが、企画のコンセプトが安易過ぎませんか? art と craft の境を問うたりする展覧会はこれまでいろいろありましたが、そうしたものをふまえて、なお、これですか?・・・」

このご批判には納得できる部分がありました。「アート」と「クラフト」、その意味内容は多岐にわたっており、この二つの言葉に集約させて単純にタイトルを付けているのは、説明不足ともいえますし、「アートとクラフトの狭間」というのも、非常に曖昧な概念で、簡単に語るには憚られるようなところもあるでしょう。しかし、ここに記された「安易」という言葉は、よく考えてみると「易しい」ということにも通じるものかと思えます。この展覧会を私は、「易しい」、そして「優しい」展覧会にしたいと考えました。ですから、ここで頂戴した「安易」というご批判が、意外に私の意図と繋がるようなところがあるようにも思いました。

いずれにせよ、賛否両論のご意見を感想ノートに頂くことは今後の美術館運営の糧となるものと思えます。沢山のご感想、ありがとうございました。(AN)

## 展覧会 現在進行形

### アルバレス・ブラボ写真展ーメキシコ、静かなる光と時

出品作品が最終的に確定して、カタログ編集が本格化しています。

メキシコの写真家マヌエル・アルバレス・ブラボ (1902~2002) の日本で初めての本格的な回顧展の開催準備を進めています。現在 (2016年2月)、出品作品 (192点) が最終

的に確定して、いよいよカタログ編集が本格化しています。

本展は、美術館連絡協議会による世田谷美術館と静岡市美術館との共同開催です。名古屋会場の会期 (11月3日~12月18日) は遙か先の話なのですが、立ち上がりとなる東京会場の開会は7月5日ですので、ほぼ4ヶ月前の差し迫った状況と言えます。巡回展を担当すると、このように自館での会期とは関係なく、立ち上がり館の会期に合わせて、仕事をしないといけないので、なかなか緊張感を高められないもどかしさがあります。

しかも、もうひとつ別に担当している特別

展「東京藝術大学コレクション 麗しきおもかげ 日本近代美術の女性像」の開幕 (3月5日) が迫っていますので、実際には、こちらの展覧会のカタログ校正や展示準備を優先しなければならぬのが現実です。しかし、アルバレス・ブラボ写真展のカタログ編集 (図版ページの割付、テキストやコラムの執筆など) の締切 (最悪でも4月中旬、おそらくGW前には必須でしょう) も待ってはくれませんので、うかうかしてられません。「麗しきおもかげ」展の最終日は4月17日ですので、それ以降は出品作の撤収・梱包作業と輸送・返却作業に専念しなければなりません。

おそらく実際の締切は自主的に繰り上げないと間に合わない恐れがあります。

先日 (1月22日)、名古屋市美術館の所蔵するメキシコの美術雑誌『Mexican Folkways』などの共同調査を行って、ブラボの最初期の仕事の幅広さを確認して、あらためてカタログの編集内容を検討するために、来週 (2月23日)、世田谷美術館で編集会議を開催します。まだまだ山あり谷ありですが、ともかく100歳まで生きたアルバレス・ブラボの70年にも及ぶ写真家としての仕事を全貌できる展覧会ですので、どうぞご期待ください。(sy)

## 郷土の作家たち

西村 千太郎 (にしむら せんたろう/1907-1994)

西村千太郎は、1907年3月12日に名古屋市中央区矢場町(現在の犬須)に生まれ、幼い頃から日本画家・森村宜稲に手解きを受ける。1922年に鈴木不知の名古屋洋画研究所に入門して、本格的に油彩画を学び始める。1924年には、太平洋画会の画家・鶴田吾郎を顧問に迎えて、尾澤辰夫らとともに「アザミ画会」を結成して、1927年の第5回春陽会展に《晩秋の池畔》が初入選した。

1929年には、第4回1930年協会展に《郊外風景》《静物》、第10回中央美術展には《都会風景》、第3回全関西洋画展には《ガード下》《風景》が続けて初入選して、第16回二科会展にも《公設市場》《バザー》が初入選。佐伯祐三のバリ風景に影響されたフォーヴィスム風の踊るような筆致による画風で、名古屋の街頭風景を描いて、画壇にデビューした。

翌1930年には、二科会会員の横井礼市を指導主任として新設された「緑ヶ丘中央洋画研究所」に入所。さらなる研鑽を積んで、全関西洋画展や二科会展の入選を重ねるとともに、名古屋の二科会系の若手画家によって、1928年に結成された「フォーブ美術協会」にも参加した。

1932年には、尾澤辰夫、水野勝美とともにフォーブ美術協会を脱退して、津田青楓洋画塾に学んだ下郷羊雄を加えて、新たなグループ「美術新選手」を結成した。この頃から、下郷を通して、シュルレアリスム(超現実主義)などの前衛絵画の刺激を受けて、フォーヴィスム風の表現から写実的な寓意画へと展開して、《虎の檻》《閨秀画家》《秋時雨の曲》など、日常生活のなかに垣間見られる奇妙な光景を描いた。

戦後は、社会的な主題による諷刺的な作品《空虚》《混沌》《過ぎたるは及ばず》などを一貫して二科会展に発表した。1960年に初個展(丸栄画廊)を開催。1961年に二科会会員となり、1973年には名古屋造形芸術短期大学の初代教授となる。1994年の第79回二科会展まで出品を続けて、7月21日に死去。(sy)



西村千太郎《虎の檻》1935年

## どっがおもしろい?!

今回は、豊橋出身の日本画家・中村正義(まさよし)(1924-1977)が1974年に描いた《舞妓図》を採り上げます。正義は戦後、それまでの日本画の既成概念を打ち壊すかのように、派手な原色や蛍光色、太くて奔放な線描など、大胆な表現方法を次々に採り込んで、観る者に強烈な印象を与える絵画を作りあげてきた作家です。「舞妓」は正義にとって重要な画題で、舞妓の姿や男の顔を何度も描きながら、正義は人間の表と裏を見つめ続けてきました。作家本人は「舞妓はどうせお化けだからね」とコメントしたと伝えられていますが\*、さて来館者の皆さんの目にはどのように映ったのでしょうか。2015年10月3日[土]から12月20日[日]の展示期間中に寄せられたご感想を紹介します。(nori)

\*吉村貞司「顔に絵画の原点を求めて ごまかしの表情引き裂く：中村正義「顔の自伝」展」[中部経済新聞] 1974年11月19日(14面)

「若い舞妓さんなのでしょう。中村さんの他の作品では、本作よりもっと黒々とした面持ちの舞妓(子?)さんが多かったように思います。舞妓さんなりたての子が、仕事をしていく中で少しずつ社会を知ってきた証(暗いイミでの。)が顔の黒斑に表現されているように思いました。しかし、その中でもどっしりと構えた表情と周りの明るさには、意思の強さを感じます。」(おいあさん 24歳)

「私たちの知らない舞妓さんが抱く闇を知っているのかな?とと思いました。そうでないとしたら怨みがあるとしたか…!!」(?さん?歳)

「舞妓が純粋に舞のために生きているのではなく、花街に売られた故の内面のドロドロを可視化しているような怨念を感じます。或いは舞妓に対するそれかもしれません。」(うにさん 42歳)

「第一印象は暗くて怖いイメージで、なんだか神隠しにあった子供の子供のようだなと思いました。舞妓さんの心の内面、暗くよんだ部分がかかっているような気がします。」(鈴さん 15歳)

「独特の威圧感を放ちながらも、こじんまりとした幼い子どものような印象も兼ね備えているように見える。題名が《舞妓図》とあるが、字義通りこの人物が舞妓であるとすると、舞妓の女社会の厳しさを訴えかけてくるようにも感じた。彼女の独特の威圧感は、内に秘めた野心から来ているような気がした。」(Serinaさん 19歳)

「顔の黒い模様が病みみたい。内面からにじみ出る業みたい。」(HWさん?歳)

「土偶かと思った。こういう顔で、こうい

う模様の、ありますよね。女性又は母性のイメージ…?でも舞妓さんは母性とはちがうかな?」(K.さん 42歳)

「土偶に舞妓の衣装を着せた様な…?古代のお面(アジア)の様な…?日本と外国が合体して後光がさす様な…?」(?さん?歳)

「舞妓を、異形のものとして、偶像崇拜しているような、おどろおどろしさと屈折した感情を見たような気がしました…!心がざわつきます…!!」(SHIさん 43歳)

「すごく妖怪みたいですてきです。いきいきとほんとうにいる妖怪みたい。ほんものの舞妓さんよりずっと親しみを感じました。」(なほみさん 60歳)

「目が細くなっているの、遠くのものを見ようとしていると思いました。なにかの説明をしているようにも思えました。きものが黄色で、色の使い方がきれいだと思います。」(日向さん 10歳)

「きいろいきものがかわいい♡こまかい?もようがおもしろいです。えりもとのもようがきものちがうもようでもちがうかんじがします。」(えみりんさん 7歳)

「ほっぺがくるくるでなんかおもしろい。おびがテレビみたいに見える。手が見えないから雨がふってきたみたい。」(こうじさん 4歳)

「舞妓さんもストレスが大変ね…とか客によるよな、いつも笑顔でおれるかよとかいろいろ考えました。」(Kunikoさん 48歳)

「泣いているのか 笑っているのか 人生ってこんなもんよ、といっているような…」(みえさん 50歳)

「自分のかくしごとを『知ってますよ。全部。』と言われている気がしてひねーと逃げ出したいくなります。」(えみさん 42歳)

水野誠司・初美 (1968- /1970- )

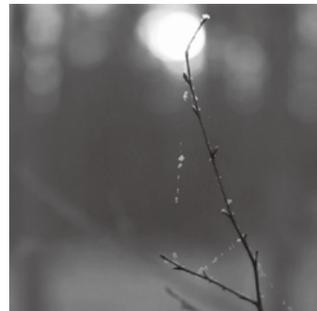
水野誠司・初美夫妻は、ヘルシンキ芸術デザイン大学(現アールト大学)写真学科を修了し、その後、写真家・プリンターのStig Gustafsson氏に師事。現在は名古屋を中心に写真を発表している。ユニットでの制作は、完全な分業ではなく、それぞれが撮影を受け持ったりプリントを受け持ったりと、その時々に必要な仕事を担当しながらのものだという。

夫妻の写真は主としてフィンランドの情景を写したものであり、その美しい自然や人物、教会などの建物が、繊細な表情をもって捉えられている。技法として「パラジウム・プリント」を使用しているため、ソフトフォーカスがかかったような、ノスタルジックな像を得ているが、この技法の制約として大きなサイズの作品を制作しにくく、小品が多くなっている。覗き込んで鑑賞するような小さな作品は、そこに映し出された風景や人物への親密な感情を抱かせるものでもあり、遠い異国への距離感とその一方で親密さとの同居して、何か、遠くを懐かしむような不思議な気持ちにさせる。

近年の新たな展開として、日本国内の滝を撮影することも試みている。また、映像表現への取り組みも見られる。

夫妻は「私たちは美しさやほかない空気感を、光とその諧調にうつしかえ、永遠にとどめたいと思う。それが、人々の精神の糧となり、長く記憶に残る価値ある作品となることを願う。」と記している。夫妻は作品の中で、凍てつく冬のフィンランドの風景をその寒さに至るまで表し、勢いよく滝壺へと流れ落ちる水と飛沫、その周辺の風景を鮮やかに写し出し、それらのもつ「美しさやほかない空気感」を捉えて定着させている。

夫妻の写真は、写真の本質に迫るものであるが、斬新さや革新性を帯びた作品というよりは、むしろ私たちの感情を緩やかに揺さぶる、しみじみとした世界の表現である。しかし、明らかに現代の表現であり、現代写真のひとつの在り方を体現しているといえるだろう。(AN)



水野誠司・初美《浮光》2013年 パラジウム・プリント

## イベントレビュー

### 常設企画展「北川民次の絵画技法」記念シンポジウム

1月23日(土)の午後、愛知県立芸術大学との共同研究による常設企画展「北川民次の絵画技法」記念シンポジウムが2階講堂で行われました。当日は雪がちらつき、時おり強風も吹きつける冷え込みの厳しい日でしたが、幸いにも多くの方にお集まりいただき、同大音楽学部打楽器科の学生によるマリンバ演奏でメキシコ音楽に触れた後、東京藝術大学名誉教授の歌田眞介氏による基調講演、研究討論会と続き、予定の2時間を超過する盛りだくさんの内容でした。

美術史研究は、一次資料である作品の観察・分析から作風の変遷をたどり、制作年代から時代背景や影響を受けた作家などを現地調査や文献で情報を集めて考察するのが一般的ですが、今回の共同研究の特徴は画家がどのような経緯で独自の絵画技法を編み出すに至ったのか、自然科学的調査や再現研究も含めた形で明らかにしようとしたところにあります。研究対象となったのは、北川民次がメキシコのタスコ滞在中に描いた《カンディダ(無垢の女)》《女の像》(以上2点公益財団法人かみや美術館所蔵)、《タスコの山》、帰国後に描いた《作文を書く少女》(以上2点当館所蔵)の4点です。

精密機器を用いた調査や成分分析から各作品に用いられた絵具や下地塗りの成分、支持体(注:キャンヴァスや板など絵画の土台と

なるもの)の材質がある程度確認できました。何を支持体を選び、どの画材を用い、安定的に固着するよう下地にどのような処理を施すか、その組合せの違いが完成作品の印象を左右します。絵具は油性ならツヤと透明感のある画面に、水性なら不透明でマットな仕上がりになりますが、調査の結果からは、テンペラ画などで使用されるエマルジョン(分散液)型絵具であることが分かりました。これは画家がすべて自製しなくてはならず、また厳密な手順に従って描く必要があり、非常に手間がかかることから日本では敬遠されてきた技法です。北川民次は絵画組成の専門家ではありませんが、メキシコの児童美術学校に職を得て絵を教えることになり、予算もなく物資も限られる中で試行錯誤しながら独自にキャンヴァスや絵具の作り方を会得した経験や、藤田嗣治との交流を通じて得た下地作りの知識などを自身の制作に生かしたと考えられます。美術史研究とは全く異なる視座からの話の数々に、画家の創意工夫の奥深さを思い知らされました。所蔵作品の新たな魅力を発見する取り組みの一つとして、今後も機会があれば協力していきたいと思えます。(3)



## イベントガイド

### ■特別展 生誕130年記念 藤田嗣治展 東と西を結ぶ絵画

日本の近代洋画を代表する画家、藤田嗣治の生誕130年を記念する展覧会。ランス市に寄贈された未公開の作品をはじめ、国内外の代表作約150点により、東と西の間に花開いた藤田嗣治の芸術の全貌を紹介します。会期: 4月29日(金・祝)~7月3日(日)

料金: 一般1,400円・高大生900円・中学生以下無料

### 【関連催事】

●記念講演会①  
日時: 4月29日(金・祝) 午後2時から  
テーマ: 「藤田とランス」\*日本語通訳付

講師: カトリヌ・ドゥロ(ランス美術館館長)

●記念講演会②  
日時: 6月4日(土) 午後2時から

テーマ: 「藤田嗣治をアジアの文脈から考える」  
講師: 林洋子(美術史家・文化庁芸術文化調査官)

### ●作品解説会

日時: 5月21日(土)、6月18日(土)

午後2時から

講師: 深谷克典(名古屋市美術館副館長)

※いずれも2F講堂・無料・先着180名

### ■特集(特別展と同会期)

#### 藤田をめぐる画家たち

藤田と同時期にパリで活躍したモディリアーニらの異邦人画家や、荻須高德など藤田と交流のあった日本人画家の作品をまとめて紹介します。

### ■常設展(特別展と同会期)

#### 名品コレクション展 I

名古屋市美術館のコレクションから厳選した作品を紹介します。

エコール・ド・パリ: シャガールの版画「死せる魂」より

メキシコ・ルネサンス: ルフィーノ・タマヨ 現代の美術: ニューヨークの日本人作家

郷土の美術: 官展に挑んだ日本画家たち

休館日は月曜(祝休日の場合は翌日)、4月19日(火)~4月28日(木)、7月5日(火)~7月29日(金)です。詳しくは、美術館HP <http://www.art-museum.city.nagoya.jp> をご覧ください。(KT)

## 展評

2016年1月16日(土)～3月21日(月)  
国立国際美術館

### 『竹岡雄二 台座から空間へ』展

京都市立芸術大学を卒業後、ドイツに渡り、デュッセルドルフにおいて40年以上に亘り制作活動を行ってきた彫刻家・竹岡雄二(1946-)の回顧展が開催されている。1980年代に本格的な作家活動を展開することになった“記念碑”的な「台座彫刻」から、1990年代の、社会性や公共性を意識した「パブリック・スカルプチャー」や、ガラスケースの形状をした「展示空間彫刻」と呼ばれる作品、さらには2000年代に入って制作された壁掛けタイプの「台座」(=壁台座)への展開をたどる。その展示構成は、竹岡個人の表現の変遷であると同時に、70年代以降の現代美術における彫刻の展開を見せるものでもある。

彫刻とは、本来“モニュメント”として成立するものであった。特定の場所にまつわる意味や出来事の記憶についての“表象”としての彫刻をその場所へと結びつけていたものが、台座であった。20世紀に入り、課せられていた「役割」から逸脱した彫刻は、台座から降り立ち、それを自らに吸収していくことになる。その展開を加速させたものこそが、展示



竹岡雄二《七つの台座》2011年  
Takeoka Yuji, courtesy of WAKO WORKS OF ART  
Photograph by: Achim Kukulies, Düsseldorf.

室というニュートラルな空間であった。そうした変遷の末に彫刻がたどり着いた地点に、竹岡の作品は位置する。ただ、注目すべきは、ミニマル・アートの彫刻作品が醸し出す禁欲的なまでの閉塞感とは別趣のものが竹岡の作品には見受けられることである。例えば、「台座」の上に掲げられた「台座」や、その内部に“四畳半”のパネルを敷き詰め

すといった体験を経るなどしているうちに彼女の中に顔というモチーフが誕生してきたことだった。今回の制作には、毎日2～300本の絵の具を開け、パレットに盛り、色を混ぜて支持体に乗せて(描いて)仕上げるのに3ヶ月ぐらいかかったという。アーティストでは、この作品について、絵画なのかどうかという議論が観客から起こっていた。支持体に絵の具が塗られているという構造を持ったものが絵画であるとすれば、紛れもなく絵画であると作家は主張していた。確かに、絵の具の質感とともに見る者に顔という概念を立ち上げさせイメージを感じさせることは紛れもなく絵画から受ける感覚だと思う。そしてなによりも、作品の圧倒的な存在感とともに、見た後になんかすごいものを見たという満足感がある。同時期に本山にあるflorist gallery Nでも、一回り小さいサイズの作品が展示された個展が開催された。今回は全身像に挑戦したいのだという。ぜひ拝見したい。(hina)



《(DEPTH)》2015年  
油彩、鉄製パネル、2450mm×3500mm  
Photo: 吉峯敦史

いところ」と考えていた人のいわば「誤解」を解こうとしたものといえそうです。この本の面白いところは、その構成にあります。美術関連の本ですから、もちろん美術作品についてもしっかりと書かれてはいますが、順番としては、作品についての記述は後回しです。プロローグは「用事がなくても美術館を訪れる時代がきた」であり、必ずしも展覧会を見る目的ではなく、ふらっと訪れることもできるのが美術館であるとしています。そして第1章「美術館という箱を存分に楽しむ」の最初に登場するのは、美術館のカフェです。著者は時に人生を見つめることもできる美術館のカフェの独特の雰囲気について語ります。美術館のカフェは私も大好きで、いろいろな美術館に行くと、カフェでお茶するのが楽しみのひとつとなっています。カフェのない美術館に行くとすこし残念に思うのです。友人や家族と、または一人で、カフェでゆったりとした時間を過ごすのも、また、美術館の楽しみ方です。この本の最初にカフェが出てくるのは、美術館に行くということが気楽に遊びに行くようなことになってほしいという著者の願いによるものではないかと思えます。この本を手にとって、美術館を訪れることが好きになり、これまで知らなかった新しい楽しみを得ることが出来る人がいらっしゃるのでは、という期待を抱きました。(AN)

た巨大なガラス・ケース《クリーンルーム・ジャパン》には、優れたアイロニーを感じさせ、ハロゲン・ランプが内蔵された《ショーケース》や、床に置かれたケースには、洒落たインテリア家具がもたらす居心地の良さすら思い起こさせる。ガラスやアクリル、あるいはその表面が鏡面のように磨き上げられた真鍮板によって、

## 展評

2016年1月24日(日)～3月20日(日)  
極小美術館(岐阜県揖斐郡池田町)

### 池田山麓現代美術展2016 宇宙の連環として

皆様は極小美術館をご存知でしょうか。力のある地元作家や有望な若手に発表の場を提供し育てていこうという意志のもと、大垣の彫刻家・長澤知明さんが自費と地元企業の寄付金で運営している私設美術館です。建物は池田山の麓に建つ一軒家を改装したものです。入館は無料ですが事前予約が必要です。美術館としては小さいかもしれませんが、2009年の開館時には「荒川修作展」、それ以降も「保田春彦展」、「河口龍夫展」といった日本を代表する現代美術家の表現を、地方で間近に見られる機会を提供してきました。

極小美術館の企画は年に4本、通常は1階でベテランまたは中堅の地元作家、3階で若手の地元作家の個展が同時に開催されています。今回の「池田山麓現代美術展2016」には、過去に極小美術館で展示をしたことのある作家、およびそれ以外で長澤さんの目にとまった若手作家の中から、彫刻家・篠田守男さんと保田さんが絞り込んだ21名が参加。河口さんや長澤さん自身も出品しましたが、作家のキャリアによる優遇はなく、様々なジャンルの作品が同列に並び、各々の個性をぶつけ

光や観る者の姿をも作品に取り込むその表情は、彫刻家が制作のコンセプトとして挙げている「見せる」ことを如何なく発揮する。観る者と空間を共有する台座。台座の上に置かれるのは、我々観る者自身の意識であるのかも知れない。(J.T.)

※同展覧会は、今年の夏、埼玉県立近代美術館に巡回、開催(2016.7.9-9.4)されます。

合っているような展示が特徴的でした。それによって見えてくるのは単に優劣だけではありません。印象深かったのは、篠田さんと河邊ありささんの彫刻。篠田さんは、銀色のアタッシュケースの内側にワイヤーを電子回路のように張り巡らせ、その張力で金属カプセルを中空に浮かせた、箱庭的「テンション彫刻」を出品。若手の河邊さんは、赤子不在のおくみや蛹の抜け殻を連想させるバイオモルフィックな形態を一木から彫り上げ、中空に浮くよう鉄棒に吊るしました。吊るす・浮かせるという手法は同じながら、前者は力学的な現象そのものの美質を引き出してみせ、後者は幽霊のような存在感、現実と非現実の中間領域を演出してみせました。世代が違えば、関心の所在も違います。「宇宙の連環として」というテーマが暗示するのは、世代や地域の枠を超える幅広い視野、および無限の想像力ではないでしょうか。(nori)



左: 篠田守男《BX3000 テンション&コンプレッション 330》1999年  
右: 河邊ありさ《あなたの輪郭は日に日に曖昧になっていったーおくるみー》2015年

## CULTURE, MOVIE, DRAMA & MUSIC

### ちょっとマイナーなニューヨーク探訪記

曜日の関係で例年より少しだけ休みが長く取れたこともあり、2015年の末に初めてニューヨークへ行きました。とにかく一度行ってみたいという漠然とした動機でしたが、2015年5月に移転・リニューアルオープンしたホイットニー美術館でフランク・ステラの回顧展、ニューヨーク・シティ・バレエの『くるみ割り人形』(隣のメトロポリタン・オペラ・ハウスの窓越しにシャガールの壁画も鑑賞)、ニューヨーク市立博物館、そしてニューヨーク近代美術館(MoMA)では特別展「Picasso Sculpture」と、短い期間ながらもマンハッタン島内を満喫しました。この中で最もマイナーな訪問先は、おそらくニューヨーク市立博物館でしょう。ミュージアム・マイルと呼ばれるセントラルパークの東側の通り沿いをジューイッシュ・ミュージアムから10ブロックほど北に進んだところにあります。お目当ての展示は「Jacob A. Riis: Revealing New York's Other Half」。近代のフォト・ジャーナリズムを牽引した一人であり、昨年度の特別展「ゴッホ・ビトウインズ: こどもを通して見る世界」のキー・パーソンですが、日本語文献が限られるだけでなく国内ではほとんど情報が手に入らなかったため、展覧会の準備段階で何度か情報提供をお願いしていました。その折にも近々

企画展を行う予定と聞いていましたが、偶然にも会期中と分かり、訪問することに。この博物館は地上3階、地下1階の瀟洒な建物の中に展示室が9つあり、住宅事情の歴史、ニューヨーク・シティマラソン、フォーク音楽の再来、ニューヨークで起こった社会活動の歴史など、都会的かつ生活に身近で多様なテーマが展示に取り上げられていました。ジェイコブ・リースは移民の貧困問題や劣悪な生活環境の改善を訴えるなど、当時の社会状況との結びつきの強い活動を行っていたため、他の展示を見ることによって補完される知識も多くありました。終わった展覧会の勉強をするなんて意味がないかもしれませんが、出品作家への興味を入り口にしてニューヨークという街が抱え続ける社会問題や歴史を知る良いきっかけになりました。何よりMoMAのように押し合いへし合いではなく、ゆったりとした気分で展示と向き合い、贅沢な時間を過ごせたのは最高でした。今回見逃したものを次いつ見に行くかは、またゆっくり考えたいと思います。(3)



ニューヨーク市立博物館(筆者撮影)

## BOOK

### 『芸術がわからなくても美術館がすごく楽しくなる本—知識がなくてもできる教養の磨き方』

藤田令伊著(秀和システム)



美術好きの人にとっては、美術館を見て歩くことはこの上ない楽しみですが、一般に、「美術館」といいますと、何かとても堅苦しい場所のように思われがちです。私たち学芸員は、何とかしてもっと気軽に美術館を楽しんでもらえないものだろうかと考えますが、なかなか難しいのが現状です。そういった意味で、この本は、これまで美術館を「堅苦し

### 【編集後記】

「アートバーバー」101号をお届けします。まずはお断り。これまで本紙一面にご寄稿いただき、皆様から好評いただいております中村英樹氏の連載「明日を呼ぶ私の記憶」は、しばらく休載とさせていただきます。つづいてお知らせ。ただ、今日につながる名古屋の現代美術の動向については、引き続き紹介すべく、本号から新たに造形作家の庄司達氏にご寄稿をお願いしました。庄司達氏は、1939年生まれ。京都市立芸術大学(現京都市立芸術大学)を卒業後、名古屋で制作活動を続けてこられました。布を素材とした同氏の作品は国内外で高い評価を得ています。1970年前後の当地・名古屋の現代美術の草創期に関わってこられた庄司氏による“体験的美術史”には、表現の動向ばかりでなく、当時の時代の熱い息吹や名古屋の街の情景までもが感じられるようです。どうぞお楽しみ下さい。新しい年度を迎えるにあたり、本紙も若干の“マイナー・チェンジ”を加えました。200号に向け、正しく心機一転のリスタートです。(J.T.)

アートバーバー第101号 発行日: 2016年4月1日  
発行 名古屋美術館  
[芸術と科学の杜・白川公園内]  
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/  
〒460-0008  
名古屋市中区栄二丁目17番25号  
地下鉄(伏見駅・大須観音駅・矢場町駅)下車  
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005  
休館日: 毎週月曜(祝日の場合は直後の平日)  
開館時間: 午前9時30分～午後5時  
祝日を除く金曜日は午後8時まで  
※入場は閉館の30分前まで



Nagoya City Art Museum